

子どもの成長と発達

森田宗一

「わたしは六つになった」という題の次のようなすばらしい詩があります。イギリスのアラン・アレキサンダー・ミルンという人の詩です。私は幼少の子供を見るたびに、いつもこの詩を思い、この詩を読むごとに、子供のすばらしい成長と発達の姿を思うのです。

一つときは
なにかも はじめてだった

二つときは
わたしは まるっきりしんまいだった

三つときは
ようやく わたしになった

四つときには

わたしは大きくなりたかった

五つときは
なにかも おもしろかった

いま六つで
わたしはありったけ おりこうです
だから いつまでも六つでありたい

一歳時は、人間（幼児）の最初の成長の峠です。

おぼつかないながら立って歩き、手を使い、心も体も人類としての動きを始めるのです。人間としての新しい出発です。生まれてから一、二歳時までの頃は、何といっても母親が絶対者です。母の胎内の延長線にいるみたいですが。母親との濃密なふれ合いが非常に大切です。母子は電波のように通じ合い、母親の感情の動き、母子の肌触れ合う溢れるような愛情が、人間の一生の基礎になるといっても過言ではありません。

三歳時ともなると、“三つ子の魂”ともいわれるように、そろそろ自我が目芽え、誰もふみこむことのできない、その子ならではの個性がはっきりしてきます。親の手もとを離れ、自立して子供自身の世界、遊びの世界を求めようになります。

“三つときは、ようやくわたしになった”この表現は、すばらしいと思います。

三歳の峠から六歳時までは、体も心も、次の段階を目指して愈々活潑に発達をします。何もかも“おもしろく”ただ“大きくなりたい”願のあらわれがよく見られます。

さて六つともなれば、子供の“わたし”はおおよそできあがるのです。子供ながらに次の社会人を目指して自立訓練の時です。親兄弟だけでなく、よそのおとなやお友達とつき合うこともおぼえねばなりません。そろそろ親離れが必要なのです。“ありったけおこりこうです”という表現が大変おもしろいと思います。欲望制御の訓練、“おあずけの味”をよく味わせねばなりません。“のびのびとけじめ”の心身の訓練と社会人として基礎になる「しつけ」が重要です。子供の世界は、遊びの世界だと言いますが、六歳頃になると、ひとり遊びや家庭内とか家の近辺での遊びだけでない。いろんなところでいろんな友達と遊び、“小さい社会人”“小さいおとな”としての遊びが大切となります。

有名な「梁塵秘抄」にも歌われています。

遊びせんとや生れけむ

戯れせんとや生れけむ

遊ぶ子どもの声きけば

わが身さえこそ動うごがるれ

生まれてから六年。それは、人類発達の六万年にも当る変化の多いながい発達の歴史です。この時期、その発達段階に応じふさわしく豊かに過すことによって、思春期を正しく迎えることができるのです。

ところが、この頃の子供たちの思春期（中高生）はあまりに暗く、あまりに問題が多いことは誰でも知っていることです。非行・登校拒否・家庭内暴力・校内暴力・自殺……問題はつきないのです。これらのケースを実際に扱って痛感することは、

幼少時における生活体験の不足から来るブリスナリティの未成熟ということ。ミルンの詩に見られるような、発達段階の成長がないのです。高校生や大学生になっても幼稚未成熟な「指示待ち人間」が年々ふえております。学生だけではない。社会人になつた筈なのに、半人前以下のおとな、幼児性をぬけ出していない者が甚だ多いのです。結婚しても母子分離できず、新婚旅行先から朝に晩に母親に電話をかけて指示を仰ぐという。そのため新妻が不満をつのらせ、新婚早々の若夫婦にゴタゴタが起る例が多い。

このようなことの最大の原因が、六歳位までの幼児の育て方の間違いにある。ミルンの詩にあるような「心身の発達」に即したたくましい成長の不足にあるように思われるのです。

（元東京家庭裁判所判事）